

# Wilfred R. Bion 研究 (I)

## —「不在の乳房」の原体験—

祖父江 典 人

### I. はじめに

Wilfred Ruprecht Bion の名は、今日の精神分析臨床において、その名を知らぬ人がいなくなってきたほど、燦然とした輝きを放ち出している。彼は必ずしも存命中に十分に評価されたわけではなく、死後その名声が高まってきたのだが、そこがいかにも天才、メシア、果てはクレイジーといった異名まで頂戴したBionらしいところと言えるのかもしれない。というのも、彼の精神分析理論は哲学や代数学や物理学からの用語の援用も多く、難解を極めるので、同時代の分析家からは敬遠されがちであった。だが、Bion は時代をはるかに先取りしていたのであり、今日その評価がようやく私たち臨床家の手に委ねられる時代が到来したと言えるのだろう。

この拙論では、端的に言えば、Bion の臨床や精神分析の人間観の中心テーマとは何かに焦点を当てて論じてみたい。もとより、Bion はその臨床実践の中で、初期にはグループ療法、次には精神病の個人療法、さらには精神分析の認識論的な探求、果ては一切の既成概念を捨てた自由な精神分析的思索など、その臨床の奥行きや思考の広がりには縦横に行き巨り、一括りに論じられるものではない。だが、それにも関わらず、Bion の臨床や理論には、初期の頃から彼ならではの情緒の陰影がつきまとい、一貫して色濃く影を落とし、晩年に至ってもその色合いを変えることはなかったと、筆者は信じている。それがここでいう「不在の乳房」という用語によって象徴される、情緒の陰影である。

Bion は「不在の乳房」という用語・概念を、思考の発達を道筋を理論化していく中ではじめて登場させ、不在と思考の発達という、一見無関係の事象を見事に関連付け、彼の思考生成理論において重要な役割を荷わせていった。すなわち、乳児が自ら望む授乳体験を得られず

にフラストレートされた時、それを「乳房の不在」と正しく認識するか、「迫害的な乳房の現出」と誤った認識を持つかによって、その後の思考やパーソナリティの発達の健康さいかんが決まってくる、というのである。

ただ、筆者の観点では、「不在の乳房」はその思考の理論の中心テーマの役割を果たしているばかりでなく、もっと広い意味で、Bion の臨床や精神分析の人間観を映し出す、重要な鍵概念と化していると思われる。それは例えば、次のようなニュアンスにおいてである。

そもそも「不在の乳房」という語感からは、さまざまなイメージが連想されよう。まず、乳房ということばには、私たちの乳幼児期の極めて個人的で原始的な感覚まで喚起されそうな、一種魔的で不可思議な魅力が醸し出されている。その乳房が不在であると、さらに否定的なことばを重ねたところに、この用語の陰影に、一層複雑な光と影の交差から成る謎が付与された印象を与えている。そこから私たちは、それぞれに、「喪失」や「分離」や「剥奪」や「空白」や、さらには「抑うつ」「狂気」などのイメージを重ね合わせることも可能だろう。こうした「不在の乳房」から喚起される多様なイメージや陰影が、Bion の臨床や人間観には終始付き纏い、一貫して最後まで突き抜けたように、筆者には思われるのである。

したがって、この小論は、Bion の理論や臨床を一々解説したり、分析したり、分類するものではない。そうではなくて、「不在の乳房」というキー・ワードを縦糸に、Bion の臨床・理論・人間観をその始まりから終わりまで、どのように理解することができるのかを問い、さらにそれを通して、私たち自身が自らの精神分析臨床を今一度見つめ直す契機ともなれば、望外の喜びである。

さて、それにはまず、Bion がさし当ってどのような

人であり、どのような人生を歩んだのかを、一通り見ておく必要がある。

## II. Bion, W.R. (1897-1979) の人生と「不在の乳房」の変遷

Bion の人生を知るには、自伝 (1982, 1985) がある (ただし、Klein, M. からの教育分析が終わりを告げる頃で、終わっている)。また、評伝としては Bléandonu (1994) のものがよくまとまっており、当を得ているし、他にも Bion の人生に関するいくつかの論及がある (Bion, F. 2000 a, b; Grinberg, L. 2000; Grotstein, J. S. 1981; Lyth, O. 1980; Mason, A. 2000; Philips, F. 1981; Symington, J. & N. 1996)。筆者自身 (1998) も、以前に簡潔に Bion の人生をまとめた機会がある。それらを参考にしながら、一通り Bion の人生を振り返っておきたい。ただし、Bion の自伝は時に散文詩のように、詩的で印象風な表現方法を取っているため、必ずしも意味をつかみやすいわけではない。

Bion は、1987年にインドのパンジャブ地方ムトラ Muttra で生まれた。当時インドはイギリスのコロニーであり、父親は土木技師としてそこで働き、同時にインド議会の事務官の仕事もしていた。職の場をコロニーに求めることは当時のそれほど富裕なわけではないイギリス中流階級にとって、必ずしも珍しくはなかったようである。Bion は家族に関して、それほど多くを語ってはいない。ただ、父親は猛獣狩りを楽しむハンターでもあり、かなりパワフルだったようだが、一方母親は、家事に従事するような平凡な女性だったようだ。むしろ、母親よりもインドの乳母 ayah の方に、Bion は思い入れを込めて親愛の念を表明しているように見える。また、Bion には Edna という年齢の近い妹がおり、幼い頃には些細なことでよく喧嘩をし、小さなライバルだったようだ。

自伝を読むと、Bion にとって人生が、とても不可解で謎に満ちたところから始まったことをよく物語っている。その一つの表れが彼の質問癖だ。Bion は父親が電気 electricity で動く電車のおもちゃを買ってくれると聞いて、その electricity ということばを、Electric City という何かの町だと勘違いし、さらにそれを聖書の中に出てくる町と関連付けたり、どんどん連想はズレていってしまう。父親は最初は、息子が電気に関する興味が出てきたものと喜んだが、次第に息子の常識的には理解に苦しむ認識のズレに気づき出し、暗澹たる気持ちになっていったようだ。他にも、父親が『不思議の国のアリス』を読んでくれたときにも、Bion はスムーズにはその話を理解できず、次々に父親に質問をす

るので、遂には父親は疲れ果て読むことを放棄してしまった。少年 Bion にとって、世界は容易には理解できない謎に満ち、その間隙を埋めようと質問をし想像をめぐらすものの、その努力はことごとく裏目に出してしまうことを、これらのエピソードは物語っている。すなわち、Bion にとって質問癖とは、世界との空隙や裂け目を埋めようとする、懸命で痛ましい努力だったようだ。

また、Bion は、幼少時から腰を床やベッドに腹ばいに押し付け、くねくね動かす自慰行為の虜にもなっていた。それは両親の目撃するところとなり、彼らはひどく戸惑い、悲しげな様子になったり、時には断固としてそれを止めさせようとしたりする。だが、Bion にはその訳が分からないので両親に質問するが、逆に彼は口を閉じるように命じられるだけで明確な答えは得られない。ここにも、もうひとつの世界との断裂が顔を覗かせている。すなわち、Bion の欲望・快感は両親や大人との間で理解の架け橋を得るところのない、断裂を生み出していたのである。

ちなみに、Bion の幼少期の様子は、Bion 晩年の論文の中にときどき登場している (Bion, W.R. 1994)。その中の質問癖の少年や、ペニスすばらしいと語る人物の目線は、Bion の少年時代そのものだろう。

Bion には世界との懸隔を埋める術がもうひとつあった。それが幼少期の自伝中に度々登場する、アルフ・アルファー Arf Arfer という超自我的な父親像を表象する白昼夢だ。アルフ・アルファーは、Bion が父親や大人との間でこころの壁を感じたり、不安が高まったりすると、おもむろに表れた。Bion はアルフ・アルファーに対して脅威を抱いたり、あるいは逆に自分をよい少年にしたててくれる願望をこめたりしている。充分成功しているとは言えないが、この白昼夢も世界と自分との断裂から生まれた原始的防衛の申し子であろう。

最後に、Bion はわずかにしか触れていないが、母親との断裂があるようだ。「母は少し脅かすところがあった」と、Bion は書いている。Bion が母親のひざの上に抱かれ、温かく安全で快適な気分に入っていると、突如冷たく脅かされる気持ちに襲われることがあった。母にはそうした予期できぬムードがあり、Bion との間に突然の断裂が口を広げることもあったようである。すなわち、温かい母(乳房)は、一陣の冷たい風と共に突如消え去り、乳房は不在と化したのである。

このように、Bion にとって、世界とは驚きと謎に満ちた魔可不思議なところから始まった。だが、幼い Bion にとってそれは世界と自分との間を鋭く遮る空隙や懸隔と感じられ、Bion はその溝を埋めようとして、質問や

白昼夢などの痛ましい自助努力を試みている。しかも、Bionは幼い子どもにとっての世界の中心である、乳房そのものに対しても、突然の予期できぬ溝を感じていたのであった。

Bionの幼児期のこのような原体験は、自伝の中で描写されているインドの気候と不思議に符合している。Bionは述べている。「激しい光、激しい暗闇、その間には何もなく、黄昏はない。苛酷な日の光と沈黙。暗い夜と猛烈な喧噪」。そして、突然スコールが襲い、突如静寂が訪れる予測のつかない苛酷な自然状況。Bionはインドの自然の中にも「予期できぬムード」や、突然の変化や、苛酷な不連続を感じ取っていた。

こうしてBionのこころの原風景は、幼少期に鑄造された。それをもう一度簡潔にまとめれば、次のようなことばの数々で紡ぎ出されよう。不可解、謎、断裂、懸隔、不連続、白昼夢、質問癖等々。このようなことばから連想される内的世界が、極めてスキゾイド的なイメージを喚起するのは、あながち穿った見方でもあるまい。Bionの歴史は、世界との懸隔をどうしようもなく痛切に感じさせられ、それを空想や思考によっていかに埋めることができるのか、というところから始まったとみることができる。そして、このことは、ことばを換えれば、乳房(世界)の不在(断裂)を、いかに思考できるかという、認識論的なテーマに繋がる。それはBionの臨床研究歴の第三期において究極まで探求されたが、筆者がここで言いたいのは、そもそもBionのこころの原風景の出発点からして、Bionは「不在の乳房」と避けようもなく遭遇し、その断裂に苦しみ、その痛みを消化しようとして思考していた、ということである。

さて、その後のBionの人生も、苛酷で引き裂かれるような運命の痛みにも容赦なくさらされたと言っても、過言ではない。まずは、イギリス本国のパブリック・スクール(ビショップス・ストートフォード・カレッジ Bishop's Stortford Collegeの私立小学校)に入学するための、母国インドや母そのものとの8歳での別離があった。これは相当にこたえたようだ。Bionは小学校での最初の1日目の様子を語っているが、周囲の少年たちの無邪気で好奇心に曝され、からかい気味の質問責めに合い、消え入りそうに萎縮している。この蒼ざめた一日目がやると終わった後、Bionは寮に帰り、ベッドの寝具の下に潜り込み、むせび泣いた。母なるものとの別離は、こうして痛ましくも苛酷な剥奪を幼いこころにもたらした。

内向的なBionにとって、このような分離や剥奪から身を守るためには、やはり傷つきを避けるための孤独への回避や、白昼夢などのスキゾイド的な防衛が必要となっ

た。しかし、ゲーム遊びでの思わぬ能力の発揮や彼の正直な人柄などが助けとなり、Bionにも特別親しい友人が二人できていく。こうしてBionは次第に世界とのズレや懸隔をうまくやりこなせるようになってはいったようだ。だが、それでも夢見がちの少年だったし、6年生のための朝食当番の時には、パンを焦がさずにうまく焼くことができなかつたり、発音が上手にコントロールできずに訛ってしまつたり、なかなかスムーズにとまではいかなかった。そして、思春期が近づくと共に、Bionにも年相応の性への関心が出てくるが、まわりの少年たちが性に対しておおらかで健全な興味を示していくのに対して、Bionはそこでもやはりひどく不器用で、とまどうことも多かったことが描かれている。

その後、こうした世界との齟齬や他者とのぎこちない関わりを、格段にうまく防衛できるようになっていったのは、彼の身体の頑健さや運動能力の高さに負うところが多かったようだ。13歳にてパブリック・スクール中等部に進む頃になると、いよいよその運動能力の高さは群を抜くようになっていく。彼は、水泳や水球、さらにはラグビーに熱中し、すぐに第一級の腕前になる。このことは、随分とBionの自己評価を高めもしたし、また周囲の少年たちの尊敬も集めたようだ。孤独でギクシャクしていた彼の世界との関わりは、こうして恰好の居場所を確保することになった。換言すれば、幼少期から繰り返されてきた「不在の乳房」(世界との断裂)の痛みは、筋肉の鎧の中にうまく閉じ込められるようになったと言えるのだろう。

身体を鍛え男性性に過激に同一化していく、このBionのスタイルは、彼の内的脆弱性を充分防衛するに余りあったようだ。その後しばらくBionの人生の方向性は、この「筋肉防衛」の延長線上で進んでいった。すなわち、まもなく始まった第一次世界大戦で、Bionはイギリス戦車部隊に配属されたが、19歳かそこの若さで戦車部隊の隊長となるものの、後にレジオン・ドヌール勲章を受けるほどの武勲を挙げる。そこでの戦闘は苛烈を極め、部隊が全滅するほどの恐怖の体験をし、Bionは晩年に至るまでその戦争について言及することができなかったほどの心的外傷を受けた。しかし、それでも彼が、内心のあまりある恐怖とは裏腹に、表の態度として勇敢に戦えたのは、彼の培ってきた「筋肉防衛」が功を奏したためだろう。戦争は、Bionにとって引き裂かれるような内的恐怖とそれを筋肉性によって防衛する苛酷な機会を極限的な様相で与えたようだ。

これまでのところで、Bionのこころのおおよその原風景とその基本的な変遷の姿を概観してきたことになる

だろう。すなわち、今一度それをまとめれば、こういうことになる。世界との断裂や疎隔感（不在の乳房の痛み）を否認もなく体験するところから Bion は生まれ落ち、それを幼少期の間はインドの風土の中で日常的にギクシャクとした体験としてくり返し味わっていた。その後の歩みとしては、8歳での別離や青年期における苛酷な戦争体験などで、世界との断裂や乳房の不在を迫害的な痛みの極みとして反復体験していく道を Bion は辿っていった。「不在の乳房」の変遷過程の観点からみれば、そうしたことになるのか。一方、その痛みをどのように防衛していったかの視点でみていけば、次のようになる。幼少期の頃にはその耐え難い世界との断裂を質問癖や白昼夢によって、架橋し、癒そうとしたが、その自動努力は必ずしも功を奏したとは言えなかった。パブリック・スクールに入った後は、孤独への逃避や真正直な誠実さによって、少しずつやりこなすようにはなっていたが、必ずしも充分ではなかった。しかし、先に述べた「筋肉防衛」を身につけてからは、Bion は世界の中に身を置く場を見つけ、それは苛酷な戦争体験にも耐えうるだけの確かな鎧となっていたようだ。

Melanie Klein と出会い、1945年から8年間教育分析を受けるまでの Bion は、基本的にはこの原型となるパターンを様相を変えて繰り返しているように、筆者には見える。それはこういうことである。戦後1919年に、Bion は、近代史や哲学を学ぶためにオックスフォード大学 Oxford University のクィーンズ・カレッジ Queen's College に入学する。そこで彼は、カント哲学者の Paton, H. J. と出会い、このことは後の Bion の精神分析の認識論に、甚大な影響を与えた。こうして Bion は一方では、世界を認識論的に理解し、構成していく道を歩むが、これは幼少期に白昼夢や質問癖によって世界との懸隔を埋めようとした作業をソフィスティケートしたものともみなすことができるだろう。その一方で Bion は、スポーツに熱中し、筋肉鎧を堅固なものとしていく。そして、遂にはオックスフォード大学において、Bion はラグビーの青章（代表）選手となり、水泳においても半青章選手の地位を獲得するに至る。「筋肉防衛」もここに極まれり、である。

Bion は、大学を卒業した後に、生計を立てるために、母校のビショップス・ストートフォード・カレッジの教師になる。Bion が赴任したとき、その生徒たちは、彼の武勲やスポーツの荣誉と共に、その雄牛のごとく大きくてがっしりとした体躯に度肝を抜かれたようだ。もはや、外見からは彼の中の「不在の乳房」の痛みは窺い知れぬほど、筋肉の鎧の奥にうまく隠されてしまってい

たのだろう。しかし、この教師生活もわずか2年ほどで幕を閉じる。それは、Bion が男子生徒のひとりと友達のように付き合っていたところ、その母親から息子が性的な誘惑を受けていると校長に訴えられ、彼は辞職するほかなくなったからである。しかし、Bion にとってはそれは全くの誤解であり、彼は釈明するも、校長にも母親にも相手にされなかった。世界との懸隔（不在の乳房）は、いきなり彼の足元に断裂を作り、筋肉の鎧も木っ端微塵に吹き飛ばすほどの残酷な仕打ちをしたのであった。

その後も、「不在の乳房」と「筋肉防衛」のいたちごっこのような応酬は続く。Bion は、辞職後遂に精神分析家になる決意を持って、ユニヴァーシティ・カレッジ・ホスピタル University College Hospital のインターンとなった。そこで Bion は Wilfred Trotter という著名な外科医の助手になることができ、大きな影響を受ける。Trotter は自らの限界を受け入れることができる、柔軟な人柄と聞く耳を持つ優秀な外科医であり、Bion は彼に同一化し、外科において優秀な成績を修め、ゴールド・メダル（最優秀賞）を受ける。こうして母校における痛手は、筋肉防衛の延長である、外科医という男性性の再強化によって首尾よく防衛されていくかに見えたが、またもこの頃 Bion は「不在の乳房」の痛烈な一撃を食らっている。すなわち、30歳になった Bion は、インターンをしている間に、医療技術を学ぶ女性と知り合い、求婚まで至り一旦は受け入れられるが、数週間後、理由も分からず、一方的にその婚約は破棄される。愛によって結ばれていたかにもみえた乳房との関わりは、いきなり不在と化し、怖ろしい断裂が口を広げたのである。Bion にとっては、先の母校での糾弾と同様に、その事態はまったく呑み込むことができず、この頃はじめて Bion は心理療法を受けたようだ。

Bion は、1930年に医師資格を得、さらに1933年にはタヴィストック・クリニック Tavistock Clinic にて職に就き、精神分析家の資格を得るべく John Rickman からの分析を1937年から受け始めた。だがそれも、1939年の第二次世界大戦の勃発で、あえなく中断の憂き目に遭っている。またしても、断裂である。しかし、後に述べるように、Bion は Rickman と共に、その後軍人精神科医としての優秀な業績をあげ、ここでも男性性の強調という筋肉防衛を達成している。しかし、その成功もすぐに「不在の乳房」の怖ろしい裂け目によって、またもや深淵に突き落とされる。すなわち、Bion は、知人を介して第二次世界大戦前に知り合った Betty Jardine という舞台女優と恋に落ち、1940年に結婚しているが、1943年にその幸せはいきなり断裂により、打ち崩された。

妻が長女を出産したという喜びの吉報を受け取ったわずか3日後に、Bettyが肺塞栓症にて亡くなったという悲報を知らされたのである。Bionは、残された幼い娘と共に悲しみに打ちひしがれ、Bettyの死を自らの咎のように責めた。つまり、出産まじかに彼女の傍にいてやれなかったことによって、自分がBettyを殺したのではないかと苛まれたのである。Bléandonu (1994)も述べているように、Bionが2冊目の自伝に「思い出される限りでの私の罪All My Sins Remembered」というタイトルをつけたのには、Bettyの死が随分と影を落としていることだろう。ちなみにこの悲劇の系譜はBion生誕の100年後にも繰り返される。長女のParthenope (Bionは長女の名に、Odysseusとの闘いに敗れ、海に身を投じて亡くなった悲劇のセイレーンの名をつけている!)は、後にイタリアにて精神分析家として開業し、1997年7月16日から19日まで、Bion生誕百年祭の国際会議を主催する。それはめでたく成功裏に終わったが、そのちょうど1年後の1998年7月16日にParthenopeは、交通事故にて18歳の娘と共に突然生涯を終えている。Bionの「不在の乳房」の断裂が、その娘と孫にまで伝達されたような因縁を感じずにはいられない。

さて、Bionの人生における「不在の乳房」の歴史は、こうしておおよそ述べたことだろう。したがって、その後のBionの人生に関しては、簡潔にまとめたい。Bionは、第二次世界大戦が終わり、1945年から1953年までMelanie Kleinに個人分析を受け、50歳を過ぎて精神分析家の資格を取得した。そして、54歳の時に、タヴィストック・クリニックで研究助手の仕事をしていたFrancescaと再婚し、一男一女をもうけた。Bionにもようやく人並みの幸せが訪れ、精神分析においても着実に業績をあげ、名実ともにクライニアンのリリーダ的存在となり、1962年には、イギリス精神分析協会の会長に就任している。しかし、1968年には、突如イギリスでの地位や仕事をすべてかなぐり捨て、カリフォルニアに移住している。その理由としては諸説あるが(Grotstein, J.S.1981;Lyth,O.1980)、妻のFrancesca (2000a)の回想が一番説得力を持っているだろう。つまり、Bionは自らの講演を、Francescaがタイプで活字にした原稿にも目を通すのを厭うほど、実務的な仕事を嫌った。そのようなBionが、イギリスにおいて要職の仕事をこなすのにいかに苦痛が伴ったかは、察するにあまりある。

Bionはカリフォルニアに移住してからは、精力的に南米やイタリアなどにも出かけ、講演旅行を楽しんだようだ。そして、晩年になっても驚くべきスタミナで、それらの講演や著述をこなす、自宅のプールで日課のスイ

ミングを楽しんだり、規則正しい生活を送った。そして、10年余りカリフォルニアで生活し、その後子どもたちの傍で余生を過ごそうと1979年にイギリスに戻ったところ、急性白血病を発見され、わずか2ヶ月後にこの世を去っている。死の床で彼が同僚に語ったとされる発言が印象深い。「人生は驚きに満ちている。だが、そのほとんどは不快なものだ」(Lyth, O. 1980)。Bionは彼独特の笑みを浮かべてそう語った。いかにもBionらしい人生のまとめである。

このように、50歳を過ぎてからのBionの人生においては、普通の家庭人としての幸せや職業人としての名声も得られ、「不在の乳房」や人生における断裂は、直接Bionの生活の中に顔を出すこともなくなっていくようである。そして、それはBionが精神分析家になってからの時期とほぼ重なっている。すなわち、Bionが精神分析家になってからは、「不在の乳房」は、彼にとって人生を翻弄する「ものそれ自体thing in itself」ではなくなり、思考される対象として、彼の精神分析理論や探求の中に編み込まれていった、と筆者は考えている。換言すれば、「不在の乳房」は、具象的なものから情緒的な思考として認識論的な変貌を遂げ、Bionの精神分析を内骨格として支える血肉と化していったのである。

では、どのように「不在の乳房」は血肉化していったのか、具象的だった「不在の乳房」はいかに思考されていったのか、そこに本論の目的もあり、またBion精神分析の真髄もあると、筆者は考えるが、その前にBionの臨床研究歴を概観する見取り図を持つ必要がある。

### III. Bion, W. R. の臨床研究歴

Bionの臨床研究歴は、次のように区分するとわかりやすい。

#### 【前—精神分析期】(軍人精神科医の時代) 1940-1948

第二次世界大戦での戦争神経症に関する実践

‘The war of nerves’ ‘Intra-group tensions in therapy’ etc.

#### 【精神分析第一期】(精神分析的グループ療法の時代)

1948-1951

タヴィストック・クリニックでのグループ療法の実践:

‘Experiences in Groups’

#### 【精神分析第二期】(精神病の精神分析の時代) 1950s

精神病の病理の解明、ピオンが臨床論文を書いた唯一

の時期: ‘Second Thoughts’

#### 【精神分析第三期】(認識論的精神分析の時代) 1960s

\* 独自の精神分析的認識論の発展: ‘Learning from

Experience’

ここでいう経験とは情緒的な意味を含んだ経験のことで、感覚印象がいかにか情緒経験、さらには思考として発展していくかを主にこころの機能論に基づいて論じられている。

- \* 精神分析や人のこころの基本構成要素としての Grid : ‘Elements of Psycho-Analysis’
- \* 究極の現実”O”の登場 : ‘Transformations’

【精神分析第四期】（「記憶なく欲望なく理解なく」の時代）1970s以降

‘Attention and Interpretation’、各種レクチャー、講演、

- \* 精神分析の理論化から、理論を越えた「未知」や「真実」の探求へ

これを見てまず特徴的なことを、いくつか述べたい。

まず、Bionの臨床研究歴は、BionがMelanie Kleinの分析を受け、精神分析家になる前と後とでは、研究の質を異にしているということである。Bionは最初は軍人精神科医から出発した。その後、1945年から1953年までKleinの分析を受け、1950年に精神分析家の資格を得ている。しかも、Kleinの分析によって、Bionは自らの直観力を格段に増したと語っている（Bion, W. R. 1985）。したがって、当然ながら精神分析家としてのBionと、軍人精神科医としてのBionとでは、臨床実践や研究の質を大きく違えていよう。

次に、Bionの臨床実践は、グループ療法から始まったということである。それは、軍人精神科医としての仕事からしてそうであったし、分析家の訓練に入ってからでもグループ実践から出発したということである。そして、その後、個人精神分析療法に臨床と研究の対象を移し、二度とグループ療法に取り組むことはなかった。

そして、不思議なことだが、Bionの臨床研究歴は、それぞれほぼ10年ごとに区切られるのも興味深い。それは、精神分析期に入ってからのものであり、10年ごとにBionは研究と臨床の大きな転換を迎えている。そして、上にまとめたように、それぞれの時期において截然たる成果を見事に成し遂げている。

さらに、Bionの精神分析期に入ってから足取りは、Melanie Kleinの後継者としての位置づけから、Bion自身としか言いようのない、オンリー・ワンの境地にまで確かに辿り着いている。

まだまだ細かく見れば、気づかれる点もあろうが、さしずめBionの業績と歩みの見取り図としては、このくらいで間に合うだろう。そして、これからこのBionの

歩みの中で「不在の乳房」がいかにか背後で影響を及ぼし、人間理解の精神分析的認識論のテーマとなり、さらには自由な思考の彼方へ疾駆していったかを見ていくことになる。

#### IV. 【前—精神分析期】における「不在の乳房」

この時期に数えることのできるBionの論文は、4つある（1940, 1943, 1946, 1948）。Bléandonu, G. (1994)によると、Bionはこの初期の4論文を出版リストに載せなかったのだと、彼の後継者はその存在を忘れていたほどだったという。どうやら、Bionにとって、これらの論文は名誉なものとはみなされていなかったようだ。しかし、それだけにBionのまだソフィスティケートされていない魂の足跡を窺い知る素材となる。

その意味で、この時期において非常に興味をひく論文は、Bionの処女作となる「神経戦」（1940）であろう。Bionは、戦争における闘いを神経戦、つまり心理的な駆け引きの面から分析し、敵を効果的に攻撃するには、敵の中の幼児的ファンタジーに由来する恐怖や不安をいかに煽り、現実を見失わせ、戦闘能力を低下させるかだと述べている。つまり、空襲などの圧倒的な恐怖状況においては、その現実的な恐怖と相俟って、幼児期に抱いたお化けファンタジーなどもまたぞろ動員されやすい。訓練された兵士は、その原初的な不安を見極め、現実状況を認識する力を持っているが、新兵や一般市民は容易にその恐怖によって攪乱されてしまうという。

この観点は、もちろん第一次世界大戦でのBion自身の極限的な体験から、直接は影響を受けて導き出されたものであろうが、筆者はそれのみならず、この観点の背後に、Bionが幼児期から曝されてきた原初的な不安の影を見る。すでにBionの人生の中で見てきたように、Bionは世界との疎隔感や断絶、つまり「不在の乳房」にいかにか対処するかに、小さい頃から苦慮してきた。この論文で描かれている原初的な不安が喚起される戦争状況とは、温かい乳房がいきなり不在になり、迫害的な乳房（敵）が現出してきたと空想されるであろう、Bionの幼児期の内的状況そのものといっても過言ではない。母に抱かれ温かく体験されていた乳房は、一陣の風と共にいきなり消え去り、冷たい乳房がそこに現れたし、また、母なる大地であるインドとも8歳でいきなり別離し、苛酷で孤独な学校状況をBionは生き延びねばならなかった。その中で彼が、いかにか内的不安に圧倒され、それを統御するかに腐心したかは、すでに見てきた通りである。この論文には、Bion自身の「神経戦」の傷痕が色濃く残っているのである。

続けてBionは、「神経戦」における兵士と市民の違いについて論じていく。それはつまるところ、原初的な不安に対して、兵士と市民とではいかにこころの面での装備が違っているかということ述べている。すなわち、原初的な不安自体は変わらないが、それに対する防御態勢が異なるということである。たとえば、兵士は明確な任務を持っており、それを達成することで人生早期からの栄光願望を成就することになるが、市民にはそうした栄誉はもたらされない。また、兵士は戦闘で死んでも、部隊の一員として名を残すが、市民は孤立しており、守られるべき集団に属していない、等々。簡単に言えば、兵士には死の恐怖に打ち勝つだけのこころの装備が、軍隊という集団によって整えられているが、市民は丸裸で戦闘状況における原初的な恐怖に立ち向かわねばならない、ということである。さらに、Bionは、警察権力などの既存の組織が、幼児期の両親とのよい関係をイメージさせるものであり、それらの大きな組織によって、一般市民は戦争状況における原初的な不安からうまく守られることもできると説いている。

このように「神経戦」における論理立ては、原初的な不安(内的不安)とその防衛という、精神分析的な着想から組み立てられている。それは1937年から受け始めたRickman, J.との個人分析に負うところも多いのだろう。まさに、Bionが精神分析家になろうとして、訓練されていた時期である。だが、Kleinから分析を受け始めたのは、1945年からのので、まだその影響は見られないし、内的世界への恐るべき直観力はまだ開花していない印象である。それと言うのも、この論文も含め、この時期のものは、内的不安をいかに防衛するかという、防衛強化の側面に力を入れて論じられているくらいがあるからだ。それはBion自身が実生活においても、第一次世界大戦では有能な軍人として武勲を上げ、男性性や「筋肉防衛」を強化することで、彼自身の内的不安(不在の乳房)に対抗しようとした生き方そのものと重なっている。Bionはこの時期、公私において、内的不安を塗り固め、囲繞しようと格闘していたのであろう。

その傾向は、この時期の他の論文においても見て取れる。「治療におけるグループ内緊張」(1943)は、Bionが1942年にノースフィールドNorthfield陸軍病院にて、6週間実践したグループ・プロジェクトであるが、ここでBionは、戦争神経症の兵士の治療を求められた。彼はそうした兵士の士気を高めるために、軍人精神科医らしいプログラムを案出している。たとえば、毎日1時間の身体訓練を日課と課し、あらゆるメンバーは、手工芸や大工仕事などのグループに、1つか2つ入らねばなら

ない等。現在で言えば、作業療法の考えに近いような視点から、士気の低下した神経症の兵士たちのリハビリを考えているようだ。いわば、運動や作業を通じて、外側から不安を抑え込んでいくやり方で、「筋肉防衛」の延長線上のものと考えてよいだろう。

だが、Bionの才能は、このような単なる軍人精神科医の域に留まらなかった。上記のプロジェクトにおいても、Bionは独自の工夫を取り入れている。すなわち、メンバーが既存のグループに飽き足りない場合は、新しいグループを作っても良いという案を盛り込んだことである。これが無気力な兵士たちにてき面の効果を表した。無気力だった兵士たちは、ダンス・グループを作ることを提案し、それが実行に移されてからは、見違えるほどの意欲を見せはじめ、行軍や他の仕事でもまとまりのある集団として従軍するようになったのである。

この成果は、Bionが兵士の外面の鎧の部分にばかり目を奪われていたのではなく、兵士の内面のモチベーションにまで目を行き届かせ、内的世界をもった人間として彼らのことを奥深く見ようとしていたことにもよるのであろう。そこに後年のBionの片鱗を見ることもできるが、その一端をさらに窺わせるのは、このプロジェクトとはほぼ同時期(直前)の1942年に取り組まれた「リーダーレス・グループ・プロジェクト」(1946)の方であろう。Bionは、イギリス陸軍省選抜委員会の要請で、将校(リーダー)になるにふさわしいキャンディデイトを選ぶプロジェクトを求められた。そこでBionが案出した方法が、後にBion自身「革新的な性質」と自画自賛したように、極めて独創的なものである。そのプロジェクトでは、8、9人のキャンディデイトから成るグループが構成され、彼らはそれをテストする将校の目の前で、橋を作るように命じられる。その際、その作業を行うに当たってのリーダーシップや組織化に関しては、何の指示も与えられない。そうした集団状況の中では、キャンディデイトはリーダーになるにふさわしい人間関係の能力を試されることになる。つまり、彼は、自らの個人的成功に関する野心や希望や恐怖と、目標達成のためにグループに課せられた要件との間で、折り合いをつけねばならない。

Bionのこのアプローチは、ある意味で人間関係の芯をついている。つまり、人が自らの欲望や不安をいかにコントロールし、大儀のために尽くせるかという視座である。Bionはその葛藤をもっとも端的に露呈しそうなプロジェクトを考え出したのである。この視点が、後の精神分析的グループ療法の集大成である、ワーク・グループと基底的想定のお考え方の萌芽を含んでいるのは、

言うまでもないだろう。

さて、こうして Bion の視野の捉えるところは、次第に人間のこころの不安や内面的葛藤に焦点が当たってきているのが、わかるのではなからうか。そして、この【前-精神分析期】の最後に書かれた論文「危機の時代における精神医学」(1948)において、それは更に推し進められようとした。この論文は、最初イギリス心理学協会 British Psychological Society において、1947年に口頭発表された。すでにその時期、Bion は Melanie Klein から個人分析を受け、2年弱ぐらい立っていた頃である。この論文自体は、西洋文明論的な色彩の濃いもので、グループ・プロジェクトの論文ではないし、ましてや精神分析的な臨床論文でもないが、Bion はこの中で、「無意識的緊張」や「情緒的発達」などの内面的な問題を、文明発達の観点から論じようとしている。つまり、これまでは間接的に扱われたり、あるいは外側から塗り固められ、強化されようとしていた内面的問題（不在の乳房）に、直接メスを入れようとする姿勢が見て取れる。そこに、Klein の分析の影響を見るのは、穿ちすぎだろうか。もっとも文明論なので、その切り口は、臨床的ではないし、評論家的なスタンスなのだが、それにしても Bion が人間の内面的不安や無意識的情緒に、より肩入れしてきたのは確かなように思われる。

その中で、特に筆者が注目するのは、テクニカル技術の進歩と情緒発達の進歩伝達との相異と、ゆとり leisure 概念を使って社会や文明の発達の要点を論じようとしていることである。Bion は、社会や文明の発達には、テクニカル技術の進歩とは違った、無意識的な情緒的要因や緊張が深く関与しているが、その情緒要因がいかに社会や世代間を通して発展していくかは、これまで充分研究されてこなかったと切り出す。こうして Bion は、文明の発達にも情緒要因（しかも無意識的なもの）という、極めて内面的な視点から問題を語ろうとしている。もはや Bion の視線の先は、内面的不安の防衛的側面ではなく、まっすぐにこころの内面に向かおうとしているのである。ただ、この時期の Bion は、人間の情緒や無意識を十分に論じるだけの方法論や観点を持っていない感は否めない。したがって、Bion は歴史学者の Toynbee の説を引用したりして、苦慮しているように見える。そして、文明発達を左右する一種の心理学的な要素として Toynbee が挙げた 'X'（未知なる要因）に着想を得て、Bion は「ゆとり」という概念を持ち出している。そして、これをもとに Bion は人間関係や文明発達のダイナミズムに切り込もうとした。

この「ゆとり」概念は、先の「リーダーレス・グルー

プ・プロジェクト」から受け継いでいる。すなわち、人間関係のダイナミックな状態を表す用語であり、文明の盛衰に関わる未知なる心理学的要因であると、Bion は規定している。そのいわんとするところは、上記のプロジェクトにおいてグループの課題達成が、その個人の内的不安や葛藤のコントロールいかにかかっているように、文明発達においても、真に大事なのは環境ではなく、人類の無意識的情緒要因の操作だ、ということである。そして、危機の時代において精神科医に要請されるのは、まさにこの人類の無意識的情緒要因の探求であるというニュアンスで締めくくられている。

残念ながら、Bion の論旨はこれ以上突っ込んで無意識の問題に入りこんではいない。したがって、この論文は、これから Bion が志す方向性を指し示す、声明文のような印象がある。すなわち、無意識や情緒や内的不安、「不在の乳房」の問題である。やはり、その問題に深くメスを入れていくには、もう少し Klein との分析が進み、Bion 自身の「未知なる情緒的要因」が開拓されるまで待たねばならなかったのだろう。

以上のように、【前-精神分析期】における Bion の業績を、主として「不在の乳房」の視点と絡めて概観してきた。そこで見えてきたものは、Bion が「不在の乳房」の周りから鎧を固めて、いかに防衛強化していくかという観点から、次第にその防衛された中身自体に直接迫ろうとしてきた歩みではなからうか。

他にもこの時期の Bion の研究には、精神分析家になって以後の Bion の面影を窺わせるような、いくつかの貴重な視点がある。2、3挙げれば、1つは、「神経戦」の中に見られる。戦時下において外的現実を正確に認識することが、いかに個人の不安の低下に繋がるかと、Bion は言及する。これは、後年の「現実を痛みと共に知ること」の重要性を説いた彼の姿勢を彷彿とさせる。他にも、この時期の研究には、二元論を用いた論究が度々見られる。たとえば、「神経戦」における原初的な不安とその防御方法の二分法、同様に「リーダーレス」における個人の内的欲望や不安とグループとしての課題という二本立ての論法、さらには「危機の時代」におけるテクニカル技術の発達と無意識的情緒発達の並置など。これらが後年の Bion のワーク・グループと基底的想定の考え方や、精神病的部分と非精神病的部分の二元論に通じるものがあることは、明らかであろう。

こうして Bion は、「不在の乳房」に直接アプローチしていく緒に就いた。ここから Bion 個人の輝かしい「神経戦」に対する戦跡は功成り名を遂げていくのであるが、それは次回以降の拙論に譲ることにしたい。



## V. 終わりに

「不在の乳房」の苛酷さを、質問癖や空想癖、さらには孤独への逃避や、後には身体を鍛えること「筋肉防衛」、その延長線上での軍人としての武勲によって、男性性へと過激に武装し防御することによって、「不在の痛み」を塗り固めようとしてきたBionであったが、次第に彼はその研究業績の中で、防衛強化の側面から、自らの内的不安自体に今一度接近していくような歩みを示し始めた。それがここで論及した【前—精神分析期】におけるBionの姿だといってもよいだろう。そして、Bionの精神を「不在の乳房」に対してさらに覚醒させ、ひらめきと直観に満ちた感性を磨き上げることになったのが、Klein, M. との出会いであった。その成果は、まずは【精神分析第一期】のグループ療法の革新的業績としてもたらされた。それがいかように達成されたのかを、「不在の乳房」との関連で、次には見ていくこととする。

## 参考文献

- Bion, F. (2000a): 'Random reflections on Bion: past, present, and future' In: Bion, T. P. et al. (2000) W.R. Bion Between Past and Future. Karnac Books
- Bion, F. (2000b): 'Postscript (January 1999)' In: Bion, T. P. et al. (2000) W.R. Bion Between Past and Future. Karnac Books
- Bion, W.R. (1940): 'The "war of nerves": civilian reaction, morale and prophylaxis' In: Miller, E. and Crichton-Miller, H. (eds) (1940) The Neuroses in War. Macmillan
- Bion, W.R. (1943): 'Intra-group tensions in therapy: their study as a task of the group' In: Bion, W.R. (1961) Experiences in Groups and Other Papers. Karnac Books
- Bion, W.R. (1946): 'The leaderless group project' Bulletin of the Menninger Clinic 10, 3 May, 77-81
- Bion, W.R. (1948): 'Psychiatry at a time of crisis' British Journal of Medical Psychology 21, 81-89
- Bion, W.R. (1982): The Long Week-End 1897-1919: Part of a Life. Reprinted (1991), Karnac Books
- Bion, W.R. (1985): All My Sins Remembered : Another Part of a Life. The Other Side of Genius: Family Letters. Reprinted (1991), Karnac Books
- Bion, W.R. (1994): Clinical Seminars and Other Works. Karnac Books, 祖父江典人訳(1998)『ピオンとの対話——そして、最後の四つの論文』金剛出版、松木邦裕、祖父江典人訳(2000)『ピオンの臨床セミナー』金剛出版
- Bléandonu, G. (1994): Wilfred Bion: His Life and Works 1897-1979. Free Association Books
- Grinberg, L. (2000): 'Foreword' In: Bion, T. P. et al. (2000) W.R. Bion Between Past and Future. Karnac Books
- Grotstein, J.S. (1981): 'Wilfred R. Bion: The Man, The Psychoanalyst, The Mystic. A Perspective on His Life and Work' In: Grotstein, J.S. (Ed) (1981) Do I Dare Disturb the Universe? Reprinted (1986), Karnac Books
- Lyth, O. (1980): 'Obituary Wilfred Ruprecht Bion (1897-1979)' The International Journal of Psychoanalysis 61, 269-273
- Mason, A. (2000): 'Bion and binocular vision' The International Journal of Psychoanalysis 81, 983-989
- Philips, F. (1981): 'A personal reminiscence: Bion, evidence of the man' In: Grotstein, J.S. (Ed) (1981) Do I Dare Disturb the Universe? Reprinted (1986), Karnac Books
- 祖父江典人 (1998): 「訳者あとがき」『ピオンとの対話——そして、最後の四つの論文』金剛出版
- Symington, J. & N. (1996): The Clinical Thinking of Wilfred Bion. Routledge

## Wilfred R. Bion Research ( I )

### -The primal experience with 'absent breast'

SOBUE Norihito

The name of Wilfred R. Bion has been prevalent nowadays in the psychoanalytic community. He was not necessarily evaluated enough in his life, but his fame has increased his reputation since his death. His psychoanalytic theory ran to the extremely difficult and borrowed words and ideas a lot from philosophy and physics, and so he was placed rather distant from analysts of his time.

The author will discuss what is the central theme of Bion's psychoanalytic view of human beings. However as he studied group therapy in the beginning of his research history and then did the individual therapy of psychosis and further proceeded epistemological research of psychoanalysis and eventually reached the free thinking distinct from any existing ideas, his ideas can not be discussed as a whole. In spite of this, the author thinks Bion's ideas can be researched on the basis of the idea of the 'absent breast' theory.

Bion presented the idea in discussing the development of thinking. That is to say, he related skillfully 'absent' to the development of thinking and it became a central part of his thinking theory. Not only the narrow meaning, the author thinks 'absent breast' is the central theme of his whole psychoanalytic view point.

At first the author will look briefly at his life and personality, and then discuss his early ideas. We will understand how 'absent breast' takes a central role in his early ideas and relates to his life.